

(同称十念)

大乘仏教は心を主と致します。心が先で身体は後であります。私共の身体に備わった感覚器官は、その使い手である心(自我観念)によって使われています。心が立とうと思えば、身体にある十八通りの筋肉のグルッペ(群)が統一的に働いて、立ち上がることでできます。物を言おうと思うと、大脳皮質を座所とする心が末端器官に命令を発し、筋肉の収縮運動を起こし、呼吸が声帯を振動させて音となります。それが喉や口の中の共鳴腔を通り、その形の大きさに応じた音色となって口から外部に出るといふ仕組みであります。

弁榮聖者はこの心を、これが俺だと思っている「小我」の中心と仰言ったのですが、この中心とは「統御する・支配する」という意味で仰言ったのであります。なるほど心が相手に降参すると、身体はそれに従つてついでいきます。心が降参しませんと、身体は殺されても相手の自由になつたことにはなりません。ですからこの心が「この体は俺だ、俺の物だ」と執着する我執の根本であつて、仏教でいわゆる第七識・末那識のことで、戒浄上人はこれを現代語で「自我観念」と仰言いました。

今聖者の御遺稿『人生の帰趣』(第四版七一頁)の「精神三階」を紐解きますと、「仏教に

は心を四位に區別しておる」といつて簡単に四位の説明をされ、そのあとに「精神三階説」を詳細に述べていらつしやいます。それで今仏教における「心四位説」について、聖者が仰言つたところを敷衍して、これから申し述べさせて頂きます。

仏教における心四位説

一、肉団心 聖者はこれを「脳髓神経等の生理学又は解剖学にて説明できる範圍についての心だ」と申していられます。つまり生理学的解剖学的に作用する心であつて、この身体、すなわち肉体の一部分と心を見るわけであります。換言すれば、有機的に高度に組織された複雑な物質、すなわち脳髓の固有な機能であり、その所産であるとだけ見ていくものであります。唯物論とはかかる実証科学の成果に基づいて、精神に対して物質の根源性を主張し、その上に構築されたものと言えます。

心と身体の問題は大変密接な関係にあることは、私共の日常経験している処ですが、しかし両者の関係をどのように理解し認識したらよいかということになると、西洋でも東洋でも大いに議論されてきました。ことに日本においてはそうです。しかし、科学的に証明されたのは、一八九六年です。ドイツのゴルツという人です。一九〇〇年代に入つてやつ

と、脳の働きが実は心の働きでもあるということが分かってきまして、戦後大脳等の生理学が大変発達しました。しかし他部門の生理学に較べると、未開拓の分野が沢山取り残されています。

二、縁慮心 これは縁というものによっておもんばかる心だ、というのでございます。

詳しく申しておると時間がございませぬから簡単に現代的に言えば、心理学的心ということになります。そう弁榮聖者は仰言つて、「それは現在のだ」と申されました。縁・対象というものがあつてそれをとらえて思い計らう心だ、それで縁によつておもんばかる心を縁慮心と申します。私共の心は、皆さんが私の声を聞いていらつしやる時、皆さんの心は私の声というものを縁として対象として、そこに働く。この黒板を御覧になつた時は、皆さんの心はこの黒板に縁ゆかりわつています。この黒板に心が縁わつて、これが黒板だとおもんばかる。これが縁慮心でございませぬ。仏教の言葉で言えば、意識、又第六識ともいいます。それは自我觀念の第七末那識に依る識ということなのです。これが縁慮心です。

三、集起心 ジッキシンと読みます。それはどんな心であるかと申しますと、今年は冷夏でございまして、海水浴へ行く日はわずかでございました。海辺を歩いていますと砂浜

に足跡がつかます。波が打ち寄せると消えます。そういうふうには私どもの身・口・意の三業は、心の中で意志する、それだけに止まらず言語的表現と身体的行動に現すのですが、それが終わると消えてなくなるか、それはゼロになるかというと、過去の経験がちゃんとそこに集まり積まれる。そして集まって働き生起する。そういうものが集まり積もり、又積もつて起こり働く、そういう心がある。それで集起心と申します。こういうふうには生まれてから今日に至るまで、見たり聞いたり心で思ったり言ったり行ったりした一切のことは、消えてなくならないで積集し集起する、そういう心がある。それが集起心だ、というのでございます。

人間というのは単なる自然的な面ではない、人間は歴史的社会的存在だ。ディメンション（次元）の上からいえば、三次元の世界はちゃんと分かるんだけど、四次元というのは直接認識できない。けれど四次元的に表現をすると、人間とは社会生活をするものだ、人間は社会的存在だ、人間は歴史的な生活をするものだ。故に「集起心」という心は歴史的だ」と弁栄聖者は仰言いました。

仏教の専門の言葉でいえば第八アローヤ識です。そうでありますから私の友達が九州に

帰ります時、関西汽船に乗りましたが沈没しました。たくさんの人が死にましたけれど、幸いにして船室から逃れ出ました。そして浮き上がるまでの間に、もの心ついてから今日に至るまでの自分のしたこと、の一切の記憶知識が、目前に浮かび上がりました。そういうものが集まって働く心というものがあるのでございます。現代の心理学で言えば深層心理ということができません。あるいは専門の言葉ではアンコンシャスネス・無意識の心理、こういうことができます。

東北大学の心理学の先生であつた千葉胤成博士は、無意識の心理学の権威者でありました。笹本上人が東北大学で『真実の自己』のお話しをなさいました。その時に、私どもは生まれ代わり死に代わりするというお話しをなさつたら、助教授とか講師とか助手とかいう方々が「アラ、この私が芋虫になつたり、げじげじになつたりするんですか」というふうにびっくりして申されました。すると千葉先生は「私は信ずる。私は自分が見た夢の日記をつけている。ある時、夢を見た。その時、山の谷間で自分はトカゲになつていた。そのトカゲである自分が山の谷間の景色を見ている。客観的に見ている。過去においてそういう経験がなかつたならば、そういう夢を見るはずがない。私はそれを信ずる」と、この

時千葉先生が言われたのでございます。そういうものを蓄える心がある。それが集起心で、歴史的な心であります。

四、真実心 真実を価値・値打ちの上から言う場合がある。これは真実でしょうか、虚偽でしょうか、とこういふふうには真善美などというのは価値論の上からの真実である。処がここである真善美の真実は、存在論・実在論の上からの真実であります。価値論の上からの真実ではない。この区別をござやござやにしてはいけないわけです。

光りは一秒間に地球を七回り半するという速さで、太陽の光りが地球に到達するのに、八分かかると学校で教わりました。けれど私共は「太陽」というといっぺんに太陽が思われる。地球一回り四万キロというが、これも一度に思われます。なぜか。かかる真実心は、心の本体であるからであります。本体は時間・空間を超越している。それを本体としていふから、私共の心は「太陽」と言えば太陽、「アンドロメダ星雲」と言えばアンドロメダ星雲、地球一回りと言つてもすぐに思える。これが本体としての心だ。超越時空としての心だ。この心を発見するのを禅宗では見性大悟と申します。真実心は生滅するものではありません。不生不滅の在り通しのものです。これを弁栄聖者は「哲学的宗教的の心だ」と

仰言いました。

このように眞実心は心の本体であつて大宇宙と一体の大我であります。これを仏教で法身と申しますが、小我に中心があつて、それを自我觀念と申し上げました。それなら觀念の本体である大我に中心があるかどうかという問題ですが、光明主義では大我に中心がある。この大我の中心が「絶対自身にして因果のない、超在一神的汎神の大ミオヤだ」と弁栄聖者は仰言いました。そして、私共の自我に相当する大ミオヤすなわち阿弥陀仏は、人に二つの自我觀念がないように、大宇宙唯一独尊の如来に在ります。この如来なる大ミオヤが、宇宙に在ります無量無数の諸仏の中心である。その大我の中心の如来に小我の中心の自我が歸命するのである。その大ミオヤと自分との關係、そこに即ち神人合一の理法がある。その如来をわが物とすれば、あとはついて来る。「報身仏は宇宙の中心本尊の理を明かさば凡そ物にて体あれば中心あり、其の中心を得れば全体を獲得することができる」(光明大系『光明の生活』第四版二八五頁)とお示し下さいました。これが光明主義中心道の念弥陀三昧(念仏三昧)であります。

仏教で以上のように言う処を、西洋の骨相学の上から言うと、靈性と理性と天性と三つ

に分けております。天性というのは、動物共通性だ、動物も持つていれば人間も動物であるから持つている。そうだけれど嗅覚においても聴覚においても、人間は動物よりも随分劣っている。子どもを産むという点においても、鼠なんかもの凄いです。とても人間が一番優れているということはできない。こういう意味において動物共通性というのであります。キリスト教はその天性を肉性というふうに言っています。

今度は理性でございます。理性は人間特有性で、人間だけが持つている心であります。あらゆる自然現象を律する理法を発見するのは理性の致す処であります。カントは理性を二つに分けてまして、理論理性と実践理性としました。自然の法則を発見するのは理論理性の致すところ。それから法律・道徳・芸術・宗教というようなものに関係のあるアプリオリな行為の道徳原理を含むものは、実践理性であると申した訳です。

そしてカントは物質と、心を持つているが天性しか働かない動物とを一つにまとめて、そして自我意識を持つ人格をもった人間だけを上位に扱いました。これはどういう訳であるかというと、理論理性によって自然法則を発見するに止まらず、実践理性の要請としてイデーの世界（自由、靈魂不滅、神の存在）の必然性を積極的に確立し、実践理性の優位

を主張しました。したがって是非・善悪の判断の能力・意志の自由をもった自我意識の所有者が人間である。かかる人格をもった人間から生まれた私共であるから、親が無宗教であつても如来様をお念じ申す心を起こす身となれる訳であります。

それから靈性でございますが、これは神人合一性、神と人と合一して一つになるという心の働きを、靈性と申す訳でございます。人が死ぬと灰になつてしまふ。無機物・有機物から私共はできているが、それらは大地と大気に散じてしまふ。残らないようになってしまふ。古歌に「世の中にわがものとはなかりけり身をさえ土に返すなり」とありますが、ところがそうではないのだ。なるほど私共の身体はそうなだけけれど、死んでもたましいが残るといふ。中国ではそう言う。そういう死人のたましいを「鬼」といふ。

だから湊川で楠正成が弟と戦死する時、「七生報国の鬼にならん」と。あの怖い鬼になるのかといふとそうではなくて、死んでもたましいがあつて七生報国するといふ。ところが死人でございますいても、生きている間から、もの凄い偉人もいる。生きている間から人間としてぐーたらもある。死んだからと言つてそのたましいは同じ訳ではない。ぐーたらは単なる鬼である。死んだたましいといふが、鬼神の神といふと生きている間からその人

は英雄・偉人であつたが故に、死んでも単なる鬼じゃなくて、鬼神だということです。威力の強いあら神だということです。それで仏教が中国へ来た時、死人のたましいととり間違えてはいけませんので、宗教の本尊を梵語 buddaha を音略して仏の字を用い「如」とも書いて神の字を使わなかつたのであります。

お釈迦様は悟りをお開きになりまして、大宇宙というものは単なる大宇宙ではなくて、実にタタター tathata¹ (梵語) というものだ、訳して如というものだと言つた。如というものは宇宙一杯の実在なる霊体を申します。それは真実在だから真如という。これは靈性を開かなければ、実地認識できないのでございます。そこで弁榮聖者はその真如というものに対して、霊体・心靈体という言葉をお使いになつた。これは弁榮聖者の新造語です。現在流行している心靈研究の心靈とは違う訳です。真如、如というものです。それで如来様というでしょ。この如来様はこういう心靈体から、現われ給うたものだ。それで如来という。だから靈性が開けることによつて、大宇宙の本体である眞実心というものが分かる。又本体の中心である大ミオヤも認識できる訳です。以上簡単に心について、精神について申し上げました。

お釈迦様がお城にいらつしやいました時に、人間の死ということについて、いつもお考えでございました。やがて自分はお父さんの後を継いで、天下の富は私の物になる。けれどお父さんが死ぬ、私もまた死ぬ。そうすると、永遠にそれを自分の物とすることはできないではないか。そうならば、人生にはもつと他に願ひ求むべきものがある筈なのだが、それは一体どういふものなのであろうか、というようなことを深刻にお考えになつていらつしやつた訳です。そうするとお父さんはそのことを非常に心配なさいました。重臣達もそうでございました。お釈迦様は皇太子であつた時、しゅうた悉多太子と言われました。

そこで「太子様よ。今、この中国においては……」（中国とはインドでは自分の国のことを中国と言つたのです。文化の一番盛んな国を中国という。まずインドにおいてはガンジス河の中流を言つた。やがてインド全体を言う。現在においてはシナを中国と言つてゐる。十九世紀以後、内面精神界にかかわるものを文化と言ひ、外面物質界にかかわるものを文明と云うことが有力となりましたが、これは達見ですね。文化とはカルチャー *culture*。カルティベイション *cultivation* は耕作であり、又教養でもある。これはアグリカルチャー *agriculture* 農業と関係がある。アグリは *field* である。農耕とは大地を耕

す。大地を耕すというのは、外側の大地だ。けれど人間の心の田地に鋤を入れる、これが文化だ。それを一心にするとということこそ、中国と称える値打ちがあると云われる処である。

「……私共が死んだならば全部ゼロになるか、あるいはそうでないか学説は一定していません。学説が一定していないようなあやふやなもののために、一生懸命お考えになるということはおやめなさいませ。それに心を勞するよりは現実の快樂を求め給え」。このように側近の者達が言った訳です。けれどそれを聞き入れられず「暗きが故に眞理を発見したいのだ」と申されてお釈迦様はお城を抜け出て、修行なされた訳です。

その当時、インドで心の田地を耕して深くして深いという人を尋ねなさいました。アララ仙人です。そのアララ仙人が一生涯かかつて到達した境界に、お釈迦様は一週間で到達なさいました。ところが到達なされた境界が、まだお釈迦様にとっては満足できなかった訳です。それは集起心の奥に肉迫していたが、未だ眞の解脱でないことを看破なさいました、そのことをお師匠様に言いましたら、「私はここまでしか行っていない。これ以上の世界を発見したなら、どうぞ私に教えて下さい」と。そこでお釈迦様はアララ仙人の許を

去つてウドラ仙人を尋ねられました。ウドラ仙人はアララ仙人よりは深い三昧に入つていますが、それでも集起心を突き抜けておりませんでした。それでもう今は自分自ら修行するより他はないといふので、尼連禪河のほとりで勤苦六年の修行をなされた、かういふのであります。

インドにおいてはその当時、九十五種・九十六種の宗教家がおりました。ところがそれは今日のように吹けば飛ぶような哲學者ではなくて、三昧心を根底としてその上に建設せられた宗教でありますので、なかなか確固たるものがありました。それらは修定主義と苦行主義の二つに分けられるわけです。それでお釈迦様は今度はこれ迄誰も及びもつかない程の苦行主義の修行をなされたのであります。私共の本能・欲情というものを徹底的に抑制すると、悟りが開けるのではないかと。けれど中々そうはいきませんでした。それで苦行主義の無益なことを知り、尼連禪河に入つて浴^ゆし、菩提樹の下で六十五日間の三昧を行ぜられ、四十九日目に十魔を降伏し、天眼明を得、次に宿命明を得て、十二月八日暁の明星ほのかに出でし時、根本無明の夢から醒めて、廓^{くわく}然として大悟し、仏陀となられたのであります。

このようにして悟りを開かれたのだけれど、その悟りは靈性を開かないと分からぬ。ところが皆が靈性開けていないというのであれば、人間は言葉を使うからその言葉で以て説くということになる訳です。そうすると私も人間は理性を開いているから、理性による処の理論とその理論の通りの実践、これを他の表現を以てすれば、学説と実行と、これは修行と言えよいのですが、この二つが必要である訳でございます。

そこで仏教の上から言えば、学説とか理論というのは正しく実践・実行するためにあるものである。これだけ研究したからと言って、靈性が顕現した訳でもなく、靈性の世界が自分のものになるという訳でもない。お釈迦様がお亡くなりになって二千五百年、お釈迦様ほど死ぬのが嫌だと思いいなくなったお方はいない。それを根本的に解決されたのがお釈迦様で、真実心、これこそ時間・空間を超えた生き通しのものだ。だから弁栄聖者はこう仰言ったのです。「生計を立てぬといかぬ、活計を立てないといかぬ。だが忙しい、だから実践・実行なんかするヒマないと言うが、生計・活計といっても肉の上のことであれば、結局死ぬじゃないか。故にこれらは死計だ。靈性開発の道こそが本当の活計だ」と。

毎年、日本で自殺する人の数を発表していますね。ところが六十才以上の高齢の自殺者

は増加しつつあります。原因は何か。それは病苦です。成程お年寄りが集まって、何の話をしてるかというのと、自分の身体の病気の話しばかりですね。そういうのが非常に多い訳です。病気の苦しみの結果として、自殺が非常に多い。本年におきましては、割合に若い人の自殺も多くなった。特に女性よりも男性の方が多くなった。バブル経済の崩壊で、非常に悩みが多い。こういうために働き盛りの人も自殺する、というようなことが起こってくると言われていきます。

それに加えて、人間の人間による疎外ですね。個人主義とは実は個人完成主義の人格主義だのに、肉団心許りこころで考えるから、利己主義に結局随する訳ですね。従って、今申した永遠に生きる処の活計を、お釈迦様が私共にお示し下さったということは、今日に至るまで未だ私ども人間の一番取り組むべき根本的な解決法であると、言える訳でございます。今日日本でこう言われます。「(仏教の)学云盛んにして、仏教は廃たる」と。理論・学説というものを理性を以てああでもない、こうでもないという。経典の中に書いてある言葉。こういうのはサンスクリットかパーリ語から翻訳したもの。それはどんな意味かということを見て、それで解決したと思ってる。こういうことでございます。「教」とは仏の説か

れた教え、「行」とは教えに従つて衆生がする修行。如説修行、如教奉行ですね。すると、行によつて「証」が得られる。

日本の植物学の大家に牧野富太郎博士がおられる。それは歴大な資料である。それをズーツと見ると、自分は植物というものが全部分かつたというけれど、しかしそれは文字の集まりです。実物ではありません。その指し示す現に生きている植物というものは、又違ふ訳です。けれど牧野先生の植物の図鑑を見て、それを手引きとして現物の植物を見ていくということは私共にもできる。ところが宗教の方は理論というものはありません。修行して靈性開発という目的を實現しないと、理論や学説はそのまま終わる。

世界の学者誰一人として異存のない、お釈迦様のお言葉に違いないという根本仏教の聖典の『経集』という中に、こういう言葉がある。「あたかも母性がそのひとり子をおのが命に代えてまもるがごとく、生きとし生きるものうえに、かぎりなき慈しみの思いをそそげ」と。釈尊は生・老・病・死の四苦から解脱する道を説かれ、すべての存在は「無常」であることを知り、我執から離れて不生不滅の真実心を悟れ、と教えられた。二千年五百年前と同じ「四苦の淵」に私共はたたずんでいる。弁栄聖者も万人がそれを現在を通じ

て乗り越えうる道を教えて下さった。須すべからく大我の中心なる大ミオヤに我人共に帰命して
自行化他したいと、こい願わざるを得ません。実際にお念仏すると、靈性は神人合一性の
心であります。如来様のお光明に照らされて靈性を開発さして頂きます。お光明とは如来
様が私共にお与え下さる処のお恵みを申します。そのお光明を頂く時は靈性が開発した時
であります。

私共には天性がある。今、教育を受けて理性というものが開発されている。日本は世界
に於いても、稀に見る理性教育の進んだ国です。今から百余年昔、明治政府が日本中津々
浦々に小学校を建てました。そうするとお百姓さんや漁師の人達が、「俺の職業の跡を継
ぐ子どもは、学校に行く必要ない。田んぼを耕したり、漁をしたりする、そういうやり方
を覚えればそれでいいんだ。そんな学校へ行ったら時間の無駄遣いだ」ところいうことで
大反対しました。けれど現在は教育の必要を認めない人はいない、少なくとも日本にはい
ない、というほど教育というものの進んだところです。けれど現在の日本の現状は甚だし
く理論理性に片寄っています。

お釈迦様を両足尊という。「それは理性と靈性の両足が円満に発達していられたから、

そう申しあげたのだ」と弁栄聖者は仰言いました。そしてそのうちの理性も理論理性と実践理性の両足が、片方が長くて片方が短いのではなくて、両方揃っているということであれば人間として完全である。それから靈性も「無邊光、これは認識の智慧で、そして無碍光、これは実践の智慧だ」と、こう弁栄聖者は仰言いましたが、お釈迦様はその両方面の足の揃ったお方です。人間としては理論理性（理論的能力、すなわち認識にかかわる能力をカントは理論理性と呼び、又思弁的理性と呼んだ）と実践理性の揃ったのが完全で、靈性の上からいえば、認識の智慧とそれから実践の智慧と揃っている、こういうお方が両足尊としてのお釈迦様だと言うことができます。如来様は四大智慧を以て、私共を照らして下さる。認識の智慧をお育て下さる。如来様は無碍光を以て私共をお照らし下さって、実践の智慧をはぐくみ下さいます。それを私共に得さして下さるのであります。人倫五常の道と中国という。仁・義・礼・智・信をいう。「その中で仁が第一である。仁というのはかわいそうと思いやる心だ」と弁栄聖者が仰言ったです。仁とは実践理性から生ずる愛であります。生んだ子がかわいいというのは、生理的な愛で犬猫の動物にもあります。

ある時、皇居のお堀の白鳥が泳いで帰ってきました。すると自分の生んだ卵の上に、青

大将がとぐろを巻いていました。お母さんの白鳥はびっくりしましたね。けれど物凄いい相をして、青大将に飛びかかった。ところが青大将はパツと振り払います。それを何回か繰り返しました。それを見つけた人が「大変だ。大変だ」と言つて皆お堀の端に寄つて来ました。そして白鳥が蛇に飛びかかるのを応援しました。その人間の応援と、白鳥がいつまでたつても止めないということに恐れをなして、卵の上にとぐろを巻いていたその青大将は逃げて行つたというのであります。当時新聞に報道されました。生んだ卵を守る、かわいという心は動物共通である。けれど「かわいそうと思う心は、人間特有の実践理性より生ずる心だ。これは違うんだ」と、こう弁業聖者は仰言つた。

仁即ち恕という。孔子様の教えは仁ということの本にしている。仁を根源として活動する。それが道徳的な行動である。こういうのは『論語』（里仁第四）に、こうあります。孔子が「吾が道は一以てこれを貫く」と申された。すると曾子は「はい」と言つた。孔子が出て行かれると門人が曾子に尋ねた。「どういう意味ですか」と。すると曾子は答えて曰く「夫子の道は忠恕のみ」と。つまり「孔子先生の道は真心をもつて他をいたわり思いやることあるばかりです」と答えた。

そうでございますから、猫が子どもを生みました。体丸うして日向ぼっこしながら子猫に乳飲ましている。ほほえましい光景である。ところがそのうち一人弱い子ができた。すると人間であれば、弱い子一人に親の情はかかる。子ども全部が同じようにかわいいんだけれど、親のかわいそうと思いやる心は、体の弱い子にかかる、これが人間である。ところがネコの場合は、親猫はそう思うかどうか知りませんが、「コイツ育たないなあ」と思うのだろうか、噛んで食べてしまいます。そうですから仁は人間特有である、いわゆる実践理性より生ずる心であります。

仁・義・礼・智・信、この智は何かという、理論理性（認識理性）より生ずる智でなくて、実践理性の智だ。今日の言葉で言えば常識とか良識の智とも申すべきですね。そこで私共善き教育を以て、認識理性と実践理性の両方の足を揃える。お念仏を申して、認識の智慧と実践の智慧の両方兼ね備えて、この人生を渡っていくということが実に大切である。だから天性という肉性だけでは、やがて全て無くなりますね。お念仏は始めは狭いかも知れませんが、お光明を頂くと時空を貫いて永遠に無限大に展開してゆく訳でございます。また、歴史的心と称すべき集起心、私共過去より持ってきた煩惱業・本能欲情はなか

なか自分の力、理性だけでは消すことはできないけれど、如来様のお光明を以てこれを消して下さる。

数日前ですか、新聞を見ているとリコーという会社がコピーをパーツと消すという技術を発見したそうです。樹脂粉末をトナーという。これを着色し、これでコピーしていく。それを熱処理で以て消すという技術を開発したという。これは外面の物質界の方のことで、内面の精神界の方では、如来様のお光明による他はない。もつとも善悪道徳律を以て自ら律していく。これはなかなか困難ですけど……。更に進んで靈性開発して如来の光明の大道を進まさして頂くと、天性・理性・靈性の三性にわたって正しく円満にお育てを頂くことが出来ます。このことは『人生の帰趣』に弁栄聖者がしかとお書き下さっております。「人はこの三性に亘りて何れも健全に発達したるものは、個性の円満なる人格と云うべきである。(中略)故に健全なる宗教の、人を作るの目的は三性(注 天性・理性・靈性)に亘りて何れも可成的に発達せしむるを要す」と。もしまだ読んでお気付きでないお方は『人生の帰趣』の前半にありますから、精読して下さいぜひその箇所をお見つけ頂きとう存じます。

(同称十念)